

in and out

高木 登

第 3 稿

07/19/25

登場人物

飯島 真由美 (45)

中野 基子 (43)

そこは旅館の一室である。

とある地方のある町村。

真由美の実家がある村の隣にある。

飯島真由美と中野基子はつきあつて十数年になるレズビアンのカップルである。東京でふたり暮らしをつづけていたが、真由美の父親の介護をしていた義理の姉が亡くなり、真由美にその任を引き継げという話が親戚内で起こった。その話し合いに参加するために帰郷したのである。

家族や親戚たちは真由美がレズビアンであることを知らない。

夜。

前説の時間があるならば、その途中で真由美役の俳優がアクティングエリアに登場し、開いた雑誌を顔に載せ、仰向けに横たわる。

そうでなければ——。

照明が点く。

雑誌を顔に載せて寝ている真由美。

そこへ基子が入ってくる。

基子（実は寝ていないのを知つていて）ねえ。

真由美……。

基子ねえ、やろう。

真由美……。

基子イヤでもあしたなんだからやろうよ。

真由美……。

基子いつしょにこつちへ越すんでしょ？ だつたらやつと

かないと。

真由美……。

基子乗り越えなきやいけないことなんだからさ、いつしょに乗り越えようよ。

顔に載せた雑誌を外し、ふいにムクツと起き上がり

る真由美。正座する。

無言だが基子の言うとおりにしようという意思があるのがわかる。

正座する真由美の隣におなじく正座する基子。

真由美 ……こちら中野基子さん。

基子 （頭を下げる）

真由美 友だちっていうか……あの、兄さんね、今まで黙つてきてほんともうしわけないと思ってるんだけどね、やつぱりこういうことつてなかなか言い出しにくくてね……できれば母さんにも生きてるうちに話したかったんだけどさ、どうしても言えなくってさ、わたしも後悔してて……いや、後悔ばっかじやなくて、これで良かつたんじやないかとも思つて……でもやっぱ後悔かな、いや、こういうことつてね、当事者の間でもいろいろ考え方があつてね、……

基子 前置き長すぎない？

真由美 順番てあるじやない、ものごとの。

基子 でも長い。

真由美 ほんのさわりでそんなこと言わないでよ。まだこのあといろいろ話さなきやならないこと天こ盛りなんだけど。

基子 どれくらいあるの。

真由美 五分…七分とか、それくらい？

基子 …長いよ…单刀直入に話した方が良いと思う。先に結論言つて、それから説明の方が。

真由美 …目に見えるわけよ。どういうことになるか。

基子 どうなるの。

真由美 大騒ぎ？

基子 …悪く考えない。

真由美 あなたはうちの家族がどういう人たちだか知らないから。

基子 真由美のご家族なんだから、良い人たちなんだつてことはわかってる。

真由美 わかつてない。わかつてないよ。ていうか、あなたのそういうところは危ない。危なつかしい。

基子 なんで？

真由美 前から思つてた。

基子 前にも言われた。

真由美 何度も言う、危なつかしい。人を信じすぎ、良い

方に解釈しそぎ、

基子 信じてるわけじゃないよ、

真由美 信じてるじゃない、

基子 だってイヤでしょ、自分が初めから不信感で見られた
りするの。

真由美 それはそうだよ、

基子 それだけだよ。マナーっていうか、礼儀作法とか気遣
いとか、そういうこと。

真由美 あのね、悪い人ってね、そういうことはぜんぶお見
通しでね、人の善意につけこんでくるの、あなたのそ
ういう態度はね、どうかだましてくださいってアピールし
てるようなもんなの、

基子 でも真由美のお兄さんは詐欺師とかじやないわけでし
ょ？

真由美 …… そうだね。

基子 だつたら良い人だつて前提で考えないと。

真由美 …… でも、基子が考へてるほど良い人でもない。

基子 ……。

真由美 そこに危なつかしさがある。あなたが思いもよら
い落とし穴がある、きっとある、そこにあなたが落ちる
のが怖い、あなたが傷つくのが怖い。

基子 わたしはべつに傷ついてもかまわなけれど。

真由美　わたしがいやなんで。あなただつていやでしょ、わたしが傷つくの。

基子　そうだね、でもわたし真由美が考へてるほど弱くないから。

真由美　わかってるよ。

基子　真由美のことも強い人だと思つてるし。

真由美　ありがとう。

基子　ただ真由美がね、自分のご家族や地元のことをね、ちよつと悪く言いすぎるのがね、引っかかってるだけ。

真由美　⋮⋮わたし、おたくのご両親がわたしたちのこと理解してくれるの、すごい感謝してるのね、

基子　うん、

真由美　それだけにね、わたしがうちの家族にわたしたちのこと話せてないのがもうしわけなくてね、

基子　それはほんと人それぞれだから、

真由美　だからね、

基子　⋮⋮。

またその場に横たわり、ふたたび顔に雑誌を載せて寝る真由美。

基子　え、なんで急に寝るの。

しばしそのままで、

真由美　……あなたはわたしの家族を知らない。わたしの家族がどういう人たちだから、この土地の人があのう人たちだから知らない。

基子　……。

真由美　あなたは恵まれてるんだよ。だからそんなに優しいんだよ。

基子　それほどじゃないよ。

真由美　でもわたしはそんなに恵まれてないの。そこにあなたを巻きこみたくないの。

基子　巻きこんでよ。パートナーなんだから。

真由美　……巻きこめない。

基子　ここまでわたしを連れてきたってことは、それなりに

覺悟決めてきたってことでしょ？

真由美　……決めてない。ずっと揺れてる。迷つてる。

基子　……。

真由美　（突然起き上がって）わたしたちレズビアンです！

もう十年以上同棲してて結婚してるも同然なんです！

基子　……。

真由美　何が起きると思う？

基子　……そうだつたんだ……つて。

真由美　……それで済めばこんなに悩まないって。自分の知つてることからちよつとでもはみ出ると停まつちやうのよ。すべてが。なにもかもが。兄だけじやない。ここに住んでる人たちみんなそう。ほんとそうなの。あなたのご両親みたいな人たちばっかりじやないんだ、この世の中は。

基子　……わかるよ。うちの父や母みたいな人ばっかりだつたら戦争なくなると思う。

真由美　この世から戦争がなくならないのは、そうじやない人たちがけつこういるからなのよ。

基子　でも殺しあいにはならないでしょ？　お兄さんと。

真由美　……。

基子　なるの？

真由美　ならないけど、血は流れるよ、（胸に手を当てて）

ここに。

基子　ごめん、わたし、あなたがけつこうネガティヴだつて

知つてゐるから、まだ信じられてないのね、バイアスかかるつてるんだろうなつて思うから。

真由美　⋮⋮わたしは、高校のときにさ、クラスにビアンの子がいたのよ、友だちじやなかつたの、仲悪いわけでもなかつたんだけど、ぜんぜん知らなくて。

基子　うん、

真由美　その子がクラスの子に告白したのね、それを告白された子がバラしちやつて、

基子　うわ、

真由美　ひどいんだ、もうレズ、レズつて。

基子　うわー⋮⋮

真由美　教師は放置、保護者も放置、そんでもつてわたしも

放置。

基子　⋮⋮。

真由美　ここにいるよ、わたしもそうだよつて言えなかつた。言える空氣じやなかつた、言わなきやならなかつたのに言えなかつた。見捨てたんだ、わたし、その子。怖くて。

基子　⋮⋮どうなつたの、その子。

真由美　わからない。越してつた。それつきり。

基子　⋮⋮。

真由美 その子がね、ひとこと言つたのよ、「なにが悪いの」って。それが忘れらんない。

基子 ……。

真由美 悪くないよって、いまでも言つてあげたい。

基子 ……。

真由美 あのときの空気を思い出すとね、この土地の人たちも、自分も信じられないのね……だから怖いの。

基子 ……。

真由美 この土地もいやだし、自分もいやだし……ここにいる自分がなんかもういやなの。逃げ出したいの。

基子 ……大前提としてね、本音としてね、お父さんの介護したい？

真由美 したいも何も親だし。しないと。

基子 お父さん、好き？

真由美 ふつうかなあ……まあ、きらいじやなかつたよ。

基子 じやあ抵抗ないのね？

真由美 ない。

基子 だつたらするしかないよね。

真由美 ……うん。

基子 いつそ隠す？ 今まで通りで。

真由美 そうしたらね、たいへんよ。大量の縁談が持ちこまれるわけよ。男あまつてんだから。みんな嫁ほしくて仕方ないんだから。この歳だつて関係ないよ。言いよられまくりよ。目に浮かぶわ、ふたりしてぐつたりしてるところが……だからわたしにはカミングアウト以外の選択肢が思いつかない。あなたとの生活を守るためにね。

基子 ……正直ね、たいへんそうだと思つてるのは事実。

真由美 ……たいへんだよ。それは確か。

基子 でもあなたと一緒にいたい気持ちの方が強いし。

真由美 ありがとう、

基子 だからこつちに越す覚悟も決めたんだけど、

真由美 うん、

基子 ……。

今度は自分が仰向けに横になる基子。

見ている真由美。

やがて、

基子 あ。

真由美 ?

基子 なんか真由美が横になりたがる理由がわかつたような
気がする。

自分も雑誌を顔に載せてみる基子。

基子 …うん。わかる。わかつたよ。

真由美 …。

基子 なんか時間が止まつた感じするよね。

真由美 …。

基子の隣に並んで寝る真由美。

真由美 …言われてみればそんな感じする。

基子 このままこうしていられたらいいね。

真由美 そうだね…でも止まつた感じするだけだからな

あ。

基子 感じだけでもするだけいい。

真由美 そうだね。

基子 めんどくさいから時間止まつてほしい。

真由美 ほしい。

基子 止まらないかなあ。

真由美 …。

基子 止まるといろいろ楽だよね。

真由美 そうだね。

基子 たとえばうちの親が倒れたりしたらさ、どうなるの？

真由美 あなたとわたしで介護だよ。

基子 ここにいながら？ 最悪別居じやない？

真由美 …。

基子 それにわたしたちもさ、年取つたら介護してもらう立場になるわけじやない？ 誰がやつてくれるの？

真由美 …あなたが倒れたらわたしがやる。わたしが倒れたらあなたがやる。

基子 あなたがいなくなつた後にわたしが倒れたら？

真由美 …。

基子 ただでさえ不自由なのにたいへんだよね。

真由美 …。

基子 年取るのつてたいへんだね。

真由美 …。

基子 年取りたくないね。

真由美 ……。

基子 このまま時間を持てたいね。

しばし沈黙するふたり。

やがて、

真由美 ……わたし、わかったよ。わたしもわかった。

基子 ……？

真由美 ……こんな時間が無いんだよ。

基子 ……。

真由美 うちの家族も、地元の友だちも。こんな時間を過ごせる人がいないんだよ。

真由美 ここにはわたしを受け入れてくれる時間が流れてないんだよ。

基子 ……。

基子 ……。

しばし黙つて仰向けのままのふたり。

やがて、真由美がおもむろに起き出す。

そして正座する。

基子、何ごとかと見て——。

真由美 兄さんね……今まで黙ってきてほんとにもうしわけないと思つてるんだけどね……できれば母さんにも生きてるうちに言いたかったんだけどさ、どうしても言えなくつてさ……中野基子さん。

基子、起きて、真由美の隣に正座する。

そして会釈。

真由美 大学の友だちなんだけど、もう十年ちょっと前からいつしょに住んでんの。友だちって言つたけど、まあ友だちなんだけど……わたしたちつきあつてんの。レズビアンなんです。わかるよね？ 女同士で……結婚できないんだけど、結婚してるとおなじ間柄なのね……そういんだけど、結婚してるとおなじ間柄なのね……そう……わたし、ずっとそうだよ……もう中学生の頃から……いわなかつただけだから……ごめん、ほんと……だからさ……どっちが妻とか夫とか、そういうのないんで……

だから……笑つて話すようなことじやないから……
だから……やめてくれるかな……それつてセクハラなん
だけど……！

基子 （小声で）悪く考えない。

真由美 （落ち着いて） そうだね……つい妄想に激怒してし
まつた……落ち着く……

基子 （うなずく）

真由美 それでね、父さんの介護のことなんだけどね、わた
しも最初は前向きだつたのね、父さん好きだし、義姉さ
んにもお世話になつたし、兄さんの苦労考えると、わた
しが後を継ぐのが筋だなつて思つたし……それにさ、あ
んまり仕事上手くいつてなくて、辞めたかったのよ。こ
のタイミングでこういう話になつて……義姉さんには申
し訳ないんだけど、そういう運命なのかなつて思つた
し、彼女の親戚がたまたまこの近くにいてね、彼女の仕
事も見つかったしね、ふたりでこつち越して、あたらし
い生活始めようと思つたのね、でもさ、黙つてゐるわけに
もいかないと思つてさ、ごまかすのもいやだしね、女ふ
たりでぜつたい変な目で見られるしさ、だからしつかり
お話ししようつて思つて……

基子 （小声で）長い。

真由美 必要な長さだから。

基子 でも長い。

真由美　⋮⋮　どう思つたかわからんけど、そういうことなの。わたしたち結婚してるの。してないけどしてるの。すぐには受け入れらんないかもしけないけど、そういうことなの。でもこれはわたしの人生の選択なんで。真剣に考えた結果なんで。受け入れてほしいです。お願い。

指ついて頭を下げる真由美。

おなじようにする基子。

真由美　（顔を上げて）それでね、今日はいったんこっち戻

つてきたんだけどさ、いろいろ考えちゃつてね、父さん好きだしさ、兄さんも好きだしさ、お義姉さんにもかわいがつてもらって感謝してるしさ、ほんと、わたし、いやな話だけど、父さんの最期看取るのは自分だつて、そうするべきなんだろうなつて、介護の話きたとき、すんなり受けとめられたつていうか、運命みたいなもんだつて思つたしね、彼女にもこのこと前向きに話してさ、彼女も受け入れてくれてね、自分の終わりは故郷で迎えるんだろうなつて、もうほんと本気で思つてたのね、なんならちよつと明るい気分にもなつてたの、あたらしい生活はじまるんだなつてわくわくしてたの、でもね⋮⋮

基子　⋮⋮。

真由美 ……でもね、こっち来たらさ、駄目なんだ。もうなんていうかさ……甘かったなって思っちゃったんだ……なにもかもがさ……自分がもうイヤでさ……わたし、ほんとの自分になりたくて東京に出たんだよ。ここじや自分でいられないから東京に逃げたんだよ。なのにこっち帰ってきたらさ、東京とおなじ自分でいられるわけないじやん、元にもどるんだよ、いろんなことが。身体からもうもどてくるんだよ、むかしの自分に。捨てたつもりだったのに、変わったつもりだつたのに、ぜんぜん変われてなかつたんだなつて、押しこめてただけだつたんだなつて、心のなかのはしつこのはしつこに押しこめて見ないようにしてただけだつたんだなつて、いろいろ気づいちやつてさ……なんかもう、ここへ来る前の前向きな気持ちがぜんぶなくなつちやつたんだよね、このままだとわたし、なんかちよつとおかしくなるつていうか、いやな人になるつていうか、とにかく自分でもあんまり好きじやない自分になりそうで、なんかいやんなつちやつてね、それでちょっと混乱してんの。

基子 ……。

真由美 自分でもよくわかんないんだ。父さんも好き。兄さんも好き。義姉さんも好き。地元の人たちだつてきらいなわけじやない。でもきらいなんだ。苦手なんだ。好きだけどきらいなの。なんだかわかんないよね、でもそうなの。わたし、考えた。これなんなんだろうつて。で、

わかった。どつちもほんとなの。好きもきらいもほんと
なの。だから悩むの。じやあどうすればいいのかつて：
：選ぶしかないの。どつちの自分がより良くて、より健
全で、より充実して……選ぶなんてえらそうだけど、自
分の人生だもん、選ぶしかないの……だから選ぶ。

基子 ……。

真由美 兄さん、ごめん、わたし父さんの介護できない、娘
なのに無責任でごめん、でもお断りします。東京で彼女
と生きる。

基子 ……。

真由美 親子の縁も兄妹の縁も切ってくれてかまいません、
ていうか切ってください、切りますわたし、もうここに
は帰つてこないし、兄さんたちの顔も見ることはないで
す、わたしのことは忘れてください、わたしもこの家の
ことは忘れる、わたしには……わたしは、自分の家族を
なくしても、彼女との生活を捨てることはできません。
彼女につらい思いをさせたり、いやな思いをさせてま
で、こっちに帰つてこられないです、すみません。

基子 ……。

真由美 ……長男だし、たいへんだよね……でもごめん、わ
たし兄さんのこと捨てる、だから兄さんもわたしのこと
捨てて……捨てられるよ……気持ちの問題なんだから：
：それだけなんだから……。

基子 …。

真由美 お集まりいただいてる皆さん、ごめんなさい。そんなわけですから、わたしのことはあてにしないでください。頼らないでください。わたしも皆さんを頼りません。今日かぎり親戚だとは思わないでください。勝手なこと言つてすみません、でもそうしてください。

基子 …。

それは事前の練習なのか、現実におこなわれていることなのか——もはや観客には区別がつかない状況である。

真由美には、その場にいる人たちから多くの言葉が投げかけられているらしい。

それは主に真由美への非難の言葉である。

真由美、黙つてそれを受けている。

かなり酷い言葉がかけられているらしいのは、基子の様子を見てもわかる。

それでもしばらく黙って受けるがままの真由美。

やがて、だいぶ沈黙がつづいたあとで——。

真由美 ……なにが悪いの。

基子 ……。

真由美 なにが悪いんですか？

力強く、覚悟を決めた顔で告げる。

暗転。

(了)